

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-05-23

T. S. エリオットのアングロ・カトリシズム

亀岡, 浩一

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編

(巻 / Volume)

99

(開始ページ / Start Page)

57

(終了ページ / End Page)

70

(発行年 / Year)

1997-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004768>

T. S. エリオットのアングロ・カトリシズム

亀岡 浩一

1. 家庭的背景

T. S. エリオットは元来ピューリタンの家系に属し、エリオット家は代々ボストンを拠点にした商人であった。しかしエリオットが生まれた地は、南西部のセント・ルイスである。これは父方の祖父 (William Greenleaf Eliot) の代に、開拓の精神に満ちた、当時は発展途上の地であったこの都市の生活と文化の向上を目指し、ユニテリアンの祖父が伝道者としてこの地に移住してきたためである。エリオットの宗教観を考える場合、幼い頃の彼を取り巻く家庭的背景がどうしても不可避と思われるので、エリオットのセント・ルイス時代における家庭環境を、アクロイド (Peter Ackroyd) の *T. S. Eliot* (1984) をもとに簡単に記しておく。

エリオットの祖父は、ハーヴァード神学校に学んだユニテリアン派の牧師であって、信仰や教育をはじめ、生活困窮者や病人のための施設作りなど、セント・ルイスの発展に大きく貢献した人物であった。祖父はエリオットが生まれる前年にこの世を去ったが、それにも拘らず、エリオット家の意思決定に依然として強い影響を及ぼすくらいに絶大な存在であった。エリオットは祖父が建てたユニテリアン派の教会で洗礼を受け、やがて祖父が創立したスミス・アカデミーにも入学した。エリオットは、生涯、祖父の偉大さを忘れることはなかったようである。

典型的なピューリタンの血を引く牧師として多大な功績を残した祖父に反抗して、エリオットの父 (Henry Ware Eliot) は、牧師になることを拒否した。父のヘンリーは、やはり祖父が建てたワシントン大学を卒業したのち、実業家としての道を歩んだ。父の事業は、近代化の進むセント・ルイスの開拓精神と見事に一致して成功を納め、エリオットが生まれた時には水圧煉瓦会社の社長になっており、大きな富を築いた。エリオットの父は聖職に就く件では祖

父に背いたが、信仰の面では祖父の教えを忠実に守るとともに、由緒ある名家の家風を受け継いだ。また、財務にも定評があって、全エリオット家の財産の管理を任されていた。エリオットの母（Charlotte Champe Eliot）は、同じくピューリタンの血を引く知的で進歩的な女性であった。学業成績が優秀であっただけでなく、文学的な才能にも大変恵まれていて、実際に詩や詩劇などの文学作品を残している。彼女は、幼児期を過ぎたばかりのエリオットに文学面での訓練を施すほど、エリオットの文学面における才能に期待を寄せていた。彼女は、自分の果たせなかった文学者としての夢を、エリオットに託したのであろう。

エリオットを育てたこうしたピューリタンの雰囲気漂う家庭環境は、エリオットの思想が形成される際の初期段階において、少なからぬ影響を及ぼしている。ただ、エリオットの思想体系全体からみて、最も重大な影響を及ぼした時期を挙げるならば、彼のハーヴァード時代がそれに当たり、この時代にエリオット思想の源泉を見出すことができる。しかし一方で、アングロ・カトリックへの改宗者としてエリオットを捉える場合、彼の家庭環境は根本的な要素として扱われねばならない問題であるようにも思われる。

エリオットの初期の詩作品では「歴史的意識^{ヒストリカル・コンシャス}」によって時代が映し出され、合理主義的な社会思潮の中であって、人々の薄れゆく原罪の観念が扱われている。従って初期作品の登場人物には、いずれも贖罪の意識がない。しかし改宗後の作品になると、原罪の問題は、神との交わりという関係に取って代えられている。そこに作用するものは宗教的意識であり、時間の同時性はこの段階ではそれほど重要な意味はもっていないように見受けられる。作品世界に現われた登場人物の個性は、初期のものよりも一層エリオットのそれに近い印象を受けないでもない。しかし同時に、宗教的意識によって一種の客体化された要素を有する個性となっているようにも読み取れる。その意味では、エリオットの改宗を境にしてみた表現方法の相違は、改宗以前の技法の屈折した方向転換ではなく、むしろ延長線的である。つまり初期作品の中に、後期作品の萌芽があると思われるのである。そして両者はアングロ・カトリシズムによって取り持たれている。

エリオットが晩年にエズラ・パウンドに宛てた書簡によると、エリオットは自分の人生を振り返って、幼い頃を過ごしたセント・ルイスでの日々と、ヴァレリー・フレッチャー（Valerie Fletcher）との再婚をしてからの日々、こ

の二つの時期だけが幸せであったと述べている⁽¹⁾。エリオットがセント・ルイスで暮らしたのは16歳までであり、再婚したのは68歳であるから、一般的に言えば、希望に満ちた青年期を経て社会的にも自立し、まさに人生の最盛期を迎えることになるであろう期間、彼はその約50年間を不幸の時代とみなしたことになる。勿論、青年期や中年期の試練が下地となって、やがて老境に最盛期を迎えるという人生もある。しかしエリオットの場合は、それと異なる。

エリオットは、健康面では確かにあまり恵まれたほうではなく、持病のヘルニアのほかにも、しばしば気管支炎に悩まされ、またヴィヴィアン（Vivienne Haigh-Wood）との最初の結婚生活が、エリオットに大きな心労を与えてしまったことも否定できない事実である。しかも二十歳代と五十歳代に、あわせて二度の世界大戦を経験するなど、公私ともにエリオットの人生には、何らかの不幸が常につきまとった。しかし第一次大戦が勃発した1914年には、戦火を逃れるために留学先のドイツからイギリスに渡り、結果的にパウンドとの運命的な出逢いを果たすことができた⁽²⁾。以後エリオットは、詩を作るだけでなく、学生時代より非常に興味を持っていた雑誌編集という念願の仕事に打ち込むことができ、文壇にも作家としての地位を築き、詩劇は特に大成功を納めた。また、フレッチャーと再婚する以前にも、名誉ある種々の賞を得ている。例えば1948年（再婚の9年前）には、当時のイギリス国王ジョージ六世からメリット勲位（The Order of Merit）を授けられ⁽³⁾、つづいて同年11月にはノーベル文学賞をも受賞した。

幸福の概念は個人によってまちまちではあるが、再婚するまでにエリオットが、不滅の金字塔を築き上げたことに疑いの余地はない。しかしパウンドに述べたように、これら一連の輝かしい社会的な業績の数々をもってしてさえ、エリオットが率直に幸福を感じられるような出来事までには、殆ど成り得なかったのである。ノーベル文学賞の受賞を知らされた時でさえ、エリオットは一時的には喜んだものの、その結果には当惑して、ノーベル賞を「葬式への切符」のようなものと形容し、会話の中でも憂鬱な様子を見せたほどである⁽⁴⁾。エリオットは常に光と影を同時に捉えていたのであり、両者に一線を画することができなかつたところに彼の不幸があったと思われるのであるが、こうした彼の性質は、エリオットの置かれた立場から生じる責任や重圧という社会的な要因以上に、むしろ彼の精神世界における個人的な苦悩と葛藤に関連するのではなかろうか。エリオットが患った神経衰弱も、「生」というものに対

して、あまりにも真っ正面から向かい合った結果であるようにも思われる。そこには、エリオット独特の攻撃的な論調によって覆い隠されている、彼本来の繊細で神経質な性格の一端が垣間見られる。エリオットのこのような性向は、日常生活においてのみだけでなく、彼の実在を支える信仰の領域においても、変わることはなかった。

2. 宗教と文学

エリオットは、アングロ・カトリックに改宗した8年後に「宗教と文学」(“Religion and Literature”)と題する評論を発表した。その中で、いわゆる「宗教文学」という場合に考えられる意味をまず三つに分類し⁽⁶⁾、キリスト教を文学の批評に適用する立場から、宗教と文学の関連性を考察している。エリオットは、文芸批評は一定の倫理的かつ神学的観点から行われることによって完成される、という命題から出発して次のように論じている。

In so far as in any age there is common agreement on ethical and theological matters, so far can literary criticism be substantive. In ages like our own, in which there is no such common agreement, it is the more necessary for Christian readers to scrutinize their reading, especially of works of imagination, with explicit ethical and theological standards ⁽⁶⁾.

物質的利益を主な目的とする現代という時代の下においては、人々の倫理的規準は、神学的規準から遊離してしまった。このことは、文学の価値を判断する際にも当てはまり、文学、特に宗教文学に関しては、人々は文学の本来もつ宗教的価値を見失い、その文学性のみを現代の倫理に当てはめようとするのである。そこで現代の文学は、キリスト教信仰の精神を徐々に弱めることになり、エリオットが最も重要な基礎として考えたキリスト教信仰を、遂には無視したり否定したりするようになる。しかしエリオットにとって、キリスト教信仰は、初めであり終わりであった。信仰と現代文学の関係に対する彼の批判は、聖書と聖書のもつ文学的要素を論じた次の言及に象徴されている。

I [Eliot] could fulminate against the men of letters who have gone into ecstasies over 'the Bible as literature', the Bible as 'the noblest monument of English prose'. Those who talk of the Bible as a 'monument of English prose' are merely admiring it as a monument over the grave of Christianity....so the Bible has had a *literary* influence upon English literature *not* because it has been considered as literature, but because it has been considered as the report of the Word of God. And the fact that men of letters now discuss it as 'literature' probably indicates the *end* of its 'literary' influence⁽⁷⁾.

聖書が、イギリス文学に対して、文学的な影響を及ぼし続けてきたのは、その優れた文学性によるからではない。確かに聖書の文学性は見事であるが、それによって影響力を発揮するとすれば、聖書の文学的価値は、時代の倫理的規準によって、時として否定されてしまうことにもなりかねない。ひいては現代という時代、つまりエリオットの言う、倫理的規準と神学的規準とが一致をみない時代にあっては、聖書は単なる一書物として宗教文学という一部門に建てられた記念碑的な存在として、文学的な生命力を失った遺物とみなされかねない。エリオットが、「今日、文学者たちが、聖書を文学として論じている事實は、聖書の文学的影響の終末を示す」と論じる根拠はそこにある。聖書は、文学である以前に、啓示の書として読まれねばならないのであり、啓示の書として書かれた聖書に文学的な影響力が備わっている点にこそ、驚愕を禁じ得ないのである。

エリオットは聖書を文学と見なすことに異議を唱える人物の一人であり、その文学性を取り扱う場合には、文学的規準と倫理的かつ神学的規準との融合を要求したのであって、エリオットは聖書に聖書本来の意義を求めたわけであり、「神の言葉の報告書」という一言には、実に大きな重みが込められている。改宗者としてのエリオットの信仰は、まさに「神の言葉」を求めるところから始まったと言っても過言ではない。

A major crux was what he [Eliot] called the "Fact of Incarnation," a "fact" that had for him the corollaries of belief in a per-

sonal God and an immortal human soul. In a review of C. J. Webb's *Group Theories of Religion* in July 1916, he suggested that he did not sympathize with Webb's demand for the "personality of God or for personal immortality" (405-6), and in a review of Collingwood's *Religion and Philosophy* in July 1917, he wrote that "philosophy can show the meaning of the statement Jesus was the Son of God, but Christianity must base itself on the 'concrete fact' of the virgin birth," a doctrine he was clearly, at that time, not able to accept, although he understood it to be a criterion of Christian faith (154)⁽⁶⁾.

精神的な苦悩を癒し、自己を救済するために、エリオットは最終的にアングロ・カトリックという道に進んだ。結果的にそれは、一種の正統性と普遍性とを重要視する彼の思想の根源にあるものとの一致を見る。エリオットが自分の宗教をアングロ・カトリックと宣言した頃は、ヴィヴィアンの精神障害という彼にとっての生涯の大問題を除けば、社会的にはかなりの名声を得て、心身ともにある程度安定した堅実な生活を送るようになっていた。パウンドに語ったように、エリオット自身にしてみれば、このような時期も幸福な晩年の生活と比べるならば、たとえそれほどの満足感が得られなかったにせよ、エリオットの周囲にいた親しい友人たちの目には、明らかに物心の両面にわたり安定し、ますますアングロ・カトリシズムの信仰を深めていくエリオットの姿が映っていた⁽⁹⁾。しかしその一方で、エリオットが確固たる信仰を得るまでには相当の苦難があったことを、やはり忘れてはならない。

アングロ・カトリックに救いを見出したエリオットの宗教意識の変遷をたどるとき、どのようにしても仏教を避けて通ることはできない。エリオットが仏教に興味を抱き始めたのは、ハーヴァード大学の大学院でインド哲学を学んでいた1911年頃である。キリスト教とは相対する宗教であるにも拘らず、仏教精神との出逢いは、ある意味で、エリオットにアングロ・カトリシズムを、キリスト教諸宗派の中でも違和感のない教義をもつ宗派の思想として受け入れさせることを可能にしたのではなかろうか。この点については、次の章において改めて論じることにして、ここでは一旦留めておく。

エリオットの宗教意識の変革に、仏教は間接的な作用を及ぼしたが、それ以

前の問題として、彼が仏教に深く魅了された背後にあったものは、ハーヴァード時代に学んだ東洋思想や教授陣の影響に先んじて、エリオット家に代々伝わるユニテリアニズムに対する、懐疑の念であると思われる。

3. ユニテリアニズムからアングロ・カトリシズムへ

エリオットの祖父はユニテリアン派の牧師で、マサチューセッツ州のボストンから1834年にセント・ルイスに移住した。その年にセント・ルイスで最初のユニテリアン派の教会(“Church of the Messiah”)を建て、ワシントン大学の創立にも寄与するなど、伝道や教育に極めて多大な貢献をした。エリオットは幼い頃から必然的に、代々の宗教であるユニテリアニズムを色濃く保つ家庭環境の中で育ってきたが、ピューリタニズムを非神話化して割り切ったユニテリアンの教義は、エリオットの気質にまず合うものではない。

ユニテリアニズムは、原罪の観念どころかむしろ人間を崇高な存在として捉え、人間の理性と良心を尊重し、三位一体の教義を否定する点にその中心思想がある⁽¹⁰⁾。ところがエリオットは、このようなユニテリアニズムを信奉する家庭において、幼心にどこか自分の信仰心とはあいられないものを漠然と感じていた。エリオットがキリスト教に求めたものは、ユニテリアンの教会が説く合理的な神の姿とは全く異なった、絶対的存在としての神であった。人間に似た神など何の意味もないことをジョン・ミドルトン・マリ(John Middleton Murry)に語ったように、エリオットは、幼い頃に自分を取り巻いていた知的でピューリタニックな合理主義を嫌った⁽¹¹⁾。

商工業都市へと開拓が進められていく当時のセント・ルイスにおいて、現実的な繁栄に結び付くユニテリアニズムは、その社会的要求とあいまって当時一般的に認知された教義となり、父は実業家として成功し、七人兄弟の末子であるエリオットは(六番目の子は幼児期に死亡)、家族の愛情に包まれて何の不自由もない幼少期を過ごした。エリオット自らがセント・ルイスでの日々を幸福な時期と語ったように、彼が家庭の宗教に具体的な懐疑を明確な形として抱くのは、後年になってからである。成人したエリオットが必要とした宗教は、皮肉にもユニテリアニズムとは正反対のものであったが、彼がアングロ・カトリシズムといった、ユニテリアニズムよりは伝統性と正統性を兼ね備えた信仰に向かったことを考え合わせるなら、セント・ルイスでの幼いエリオットが、

カトリック信者の乳母アニー・ダン（Annie Dunne）に連れられて行ったカトリック教会からミサの神秘的な雰囲気を感じとり、強烈な印象をエリオットに残したとしても無理はない。また、ハーヴァード大学でインド哲学や仏教に関心を示したのは、セント・ルイスのカトリック教会での体験（具体的な信仰体験ではなく、教会の装飾やミサの儀式から感じられる、ユニテリアン派の教会とは違った雰囲気など）とあいまって、ユニテリアニズムからは決して得ることのできなかった、神秘的で人間の知恵ではとても計り知れない何か（“something”）を異教の中から見出すことで、エリオット自身の精神世界を満たそうとしたためではなかろうか。実際にエリオットは、ハーヴァード時代を振り返って、東洋の神秘の奥深くに入り込んでみたいという強い願望が、当時の彼にあったことを認めている⁽¹²⁾。東洋思想に惹かれたエリオットが仏教から中道の精神を学び⁽¹³⁾、一切のとらわれを離れて公平に現実を見極め、正しい判断と行動をとろうとする、いわゆる不偏中正の精神が、正統性と普遍性を重視したエリオットの内的世界を一層刺激したであろうことは想像に難くない。エリオットの詩作品に仏教的要素が内在しているのはこのためであり、仏教の根本思想は、創作面においてだけでなく、彼の思想体系にも影響を及ぼしている。

エリオットは、しかしながら、ヨーロッパ人としてキリスト教徒の道を選択し、文学の価値を判断する際には、キリスト教信仰に根差して行おうとする立場に至ったのである。ここで注意したいのは、キリスト教以外の宗教を、キリスト教でないという理由から異端として排斥してしまうのではなく、キリスト教からみた異教の宗教思想をも含め、包括的な考え方をエリオットが抱くようになったことである。インド哲学や仏教を通して得た中道の精神をもって、ローマ・カトリック教会の要素を残しながらも、イギリスの伝統の中で、もはやプロテスタント教会との中間的な位置に存在する英国国教会のアングロ・カトリシズムを信奉することは、エリオットの宗教意識における、ローマ・カトリック教会に対する英国国教会の正統性と普遍性に関する優位を示唆するものである。そして同時に、エリオットの教会観は、翻って考えるならば、エリオットがローマ・カトリック教会に向かわなかった一因であるといえる。

4. エリオットの教会観

エリオットの教会観は、彼がユニテリアニズムを棄てることになった要因と密接に関連している。エリオットはユニテリアン教会が説く三位一体説の否定を、どうしても受け入れることができなかった。つまりエリオットは、キリスト教の本質を、キリストにおける神の受肉にあると考えたのであるが、このような信仰を抱く彼が伝統的なキリスト教の精神を求めながらも、キリスト教会の歴史からみて、その本流であるはずのローマ・カトリック教会に参加しなかった事実は、ある意味では英国国教会の歴史的な立場を同時に物語っている。

The Church of England is the creation not of the reign of Henry VIII or of the reign of Edward VI, but of the reign of Elizabeth. The *via media* which is the spirit of Anglicanism was the spirit of Elizabeth in all things; the last of the humble Welsh family of Tudor was the first and most complete incarnation of English policy⁽¹⁴⁾.

英国国教会がローマ教皇の支配を脱したのち、組織体としての教会制度が改めて強化されるのはエリザベス朝に入ってからであり、エリザベス朝末期になると一応の確立をみせた。しかしエリオットが、英国国教会の創設をエリザベス女王治世下と考えたのは、強化された教会制度のためではなく、英国国教会が標榜するヴィア・メディア（中道主義）のためである。そしてエリザベスの精神であるヴィア・メディアをもって、当時の英国国教会が教皇制度と長老制度との中間の道を見出そうとしたことを、エリオットは実に高く評価している。エリザベス女王の治世下において、英国国教会がヴィア・メディアの教会として自らの立場を示し得た背後には、ルネッサンスの精神があったことも事実である。英国国教会は、ローマ教皇とは絶縁したにも拘らずローマ・カトリック教会の制度を取り込みながら、イギリス独自の教会として、伝統と新たな知識とが融合した普遍的なキリスト教会としての道を歩み始めたのである。それを可能にした柔軟性は、まさにルネッサンスがもたらした副産物の一つで

ある。

そしてエリオットにおいて伝統と進歩の融合は、キリスト教信仰と文化の調和という形をとって現れた。従ってエリオットは「いかなる宗教も、その時代の最も優れた精神がそれを築きあげることに非協力的であったなら、歴史の審判に耐えて生き残ることはできない。もしエリザベスの教会が、シェイクスピアとジョンソンの時代にふさわしいものであるのならば、それはフッカーとアンドルーズのお陰である」⁽¹⁶⁾と述べるのである。これは、フッカー (Richard Hooker) とアンドルーズ (Lancelot Andrewes) の「知的業績」と「散文の文体」が英国国教会の構造を完成させた、という見解に基づいてなされたものである。彼ら二人の英国国教会に対する別の貢献を挙げるとすれば、知性と感受性の調和および全ヨーロッパ的伝統とルネッサンス文化の統合、この二点ではなかろうか。つまり彼らに象徴されるアングリカニズムの精神であるヴィア・メディアは、エリオットの思想体系と教会観が形成されるうえで中核的な概念となっており、この点においてエリオットのキリスト教における正統性が、英国国教会の中に具現されているのである。

英国国教会は十九世紀になると、神と個人との関係を尊重する合理主義的なプロテスタンティズムの道に入り始めた。そこでロー・チャーチ (低教会派) に対抗する形でオックスフォード・ムーヴメントが起こったことは歴史が示すとおりである。近代化という時代の流れの中において、英国国教会にカトリックの教義と制度を復興させようとする運動がアングロ・カトリシズムを産み、曲折を経て教会内における中心思想としての地位を確立していった。一方、エリオットは真面目に教会生活を守り抜こうとする人物であって、秘^{サクラメント}跡に対する彼の真摯な態度は、並々ならぬものであった。エリオットの篤い信仰心は、ハイ・チャーチ (高教会派) の根本的な精神と密着しており、理性的な部分においても、彼の価値観とアングロ・カトリシズムとは、互いに融和し得るものである。中世の伝統的なキリスト教は、エリオットから見れば英国国教会に受け継がれていたのである。

エリオットは英国国教会の一員になった4年後に『ランベス会議後の感想』(Thoughts After Lambeth) と題した評論で、英国国教会の性質について論じている。その中でエリオットは一般原則に触れ、ローマ・カトリック教会と英国国教会とを比較して、「原則は一つの例外をも含まないものとして肯定され、その原則を修正せずにあとで例外を処理していくべきである、というのが

ローマ・カトリック教会の一般的な見解であるように思われる。これに対して、むしろ原則は許容し得るあらゆる例外を含むような方法で形成されねばならない、というのがイギリス的な考え方にふさわしい見解であると思われる。従って必然的に、ローマ・カトリック教会は固定していることを明言し、英国国教会は、状態の変化を考慮に入れることを明言しなければならない結果になる」⁽¹⁶⁾と指摘し、ローマ・カトリック教会の形式ばった堅苦しい制度よりも、英国国教会の柔軟で包括的な在り方のほうを高く評価している。こうした柔軟性や包括性は、英国国教会という実に微妙な歴史をもった教会だけに許された一種の例外的な性質であって、ある意味ではエリオットにとってのアングリカニズムのヴィア・メディアを支えるものでもある。なぜならエリオットの神学は、個人の問題を社会という広い範囲から見つめ直し、贖罪に意識を集中させるものだからである。

What in England is the right balance between individual liberty and discipline?—between individual responsibility and obedience?—active co-operation and passive reception? And to what extremity are divergences of belief and practice permissible? These are questions which the English mind must always ask; and the answers can only be found, if with hesitation and difficulty, through the English Church⁽¹⁷⁾.

ここに論じられている内容は、英国国教会の一員として新たな道を進み始めたエリオットの、いわば信仰告白のような印象さえ感じさせる主張ではあるが、「ほどよい均衡はどこにあるのか」ということを常に問わねばならない疑問として考えると、エリオットの中道の精神がある。そして特に1930年のランベス会議において、英国国教会のカトリック性が以前のいかなる会議にもまして確認されたことを評価し、その報告書によって英国国教会が、非国教派教会に対してこれ以上良い顔はできないという限界が明示され、また、東方教会およびバルト教会と、どのくらいまで交流する準備があるのか、その程度が一層明確にされた⁽¹⁸⁾、と論を展開するのである。エリオットの論述は教会再一致(“Reunion”)の問題を視野に入れてのことではあるが、エリオットが教会を国家との関係で捉えている点が特徴的である。エリオットにとって

は、たとえ個人の信仰といえども、それが可視的社会である教会と結び付くことに重要な意味があるのであって、伝統的なカトリック教会の儀式を守ることで神による宥和が得られると信じたのである。エリオットの改宗に伴う信仰心の変化は、彼の宗教観や教会観に影響を及ぼしたことは当然であるが、それと同時に、一般社会における価値判断の基準にも影響を与えた。エリオットの批評から窺えるように、彼は改宗後、社会の世俗化を考える傾向が以前にもまして強くなっていく。しかしその傾向は、初期にみられた伝統意識に基づくというよりは、どちらかといえば、キリスト教信仰の精神に基づいたものであって、その視点の移動によって教会と社会とが結ばれていくのである⁽¹⁹⁾。

エリオットが「カトリック教会の一支部、つまりイギリスにおけるカトリック教会」⁽²⁰⁾と位置づける英国国教会の地位は、少なくともイギリスという一国家においては、正統的教会としての普遍性が一般的に認知されつつあることを裏付けるものである。ただし教会内の不一致が解消したわけではないが、思想の流れとしてアングロ・カトリシズムは、エヴァンゼリカリズムのしがらみを、ほぼ完全に克服したと言えるであろう。エリオットは、墮落した時代において文明を建て直し、「世界」を自殺から救うためには、キリスト教信仰を辛抱強く守るしかない⁽²¹⁾、と論断する。ここで考えられるキリスト教信仰とは、神と個人の直接的な関係を尊重するという意味での進歩的な個人主義的信仰ではない。エリオットのキリスト教信仰は、社会の枠組みの中で捉えられており、その基礎を形成するものは原罪の意識であったと思われる。中世のキリスト教に顕著であった、人類の墮落の観念がエリオットにはあった。エリオットはキリストの神性を信じ、キリストによらなければ、神と人類との取り成しは絶対にあり得ないと確信した。英国国教会に継承されたカトリックの伝統的儀式に自分自身を従属させることを可能にしたものは、まず第一にエリオット自身が信じた原罪説であるが、第二としては、ハリファックス卿（Lord Halifax）の存在を挙げることができる。

ハリファックス卿は、平信徒ながらもアングロ・カトリックの指導者として、英国国教会に対し相当の影響をもつ人物であった。彼はローマ・カトリック的性格の強い信仰をもっており、ローマ教皇の首位権についても不服はなく、更にローマ・カトリック教会司教の祈禱書を毎日使うほどであった⁽²²⁾。ハリファックス卿を通じて得られるカトリックの雰囲気は、エリオットにとっては中世のキリスト教が抱いていたであろう雰囲気として感じられたに違いない。

エリオットが特に聖体拝領を大切にしていたところからしても、エリオットの原罪の問題は、彼を取り巻くカトリックの雰囲気の中で徐々に掘り下げられていったにほかならない。そしてエリオットは自ら、

Whether established or disestablished, the Church of England can never be reduced to the condition of a Sect, unless by some irrational act of suicide; even in the sense in which, with all due respect, the Roman Church is in England a sect. It is easier for the Church of England to become Catholic, than for the Church of Rome in England to become English; and if the Church of England was mutilated by separation from Rome, the Church of Rome was mutilated by separation from England. If England is ever to be in any appreciable degree converted to Christianity, it can only be through the Church of England⁽²³⁾.

と声明し、イギリス国内における英国国教会の在り方にまで言い及ぶ。エリオットのこの言葉は、英国国教会が教会再一致の義務を担う唯一の教会であると考えたエリオットの説の拠り所となっているが、英国国教会のカトリック性が国家および社会との関係で捉えられている点に、象徴的にはあるがあらゆる意味で、改宗後のエリオットの文明批評において展開される主題の胎動を見出すのである。

《注》

- (1) Eliot to Ezra Pound, 11 November 1961, Beinecke.
- (2) エリオットは、コンラッド・エイケンの紹介でパウンドを訪れた。パウンドはすぐにエリオットの詩才を見抜き、詩の推敲を行うなど、何かとエリオットの世話をしはじめる。Cf. "To Ezra Pound," 2 February 1915, *The Letters of T. S. Eliot*, ed. Valerie Eliot (London: Faber and Faber, 1988), I, 86-87.
- (3) 1902年に制定され、文武の殊勲のあった24人に限り与えられる名誉勲位。
- (4) エリオットは次のように表現している。
"The Nobel is a ticket to one's funeral. No one has ever done anything after he got it." Eileen Simpson, *Poets In Their Youth*, as quoted in Peter Ackroyd, *T. S. Eliot* (London: Hamish Hamilton, 1984), p.290.
- (5) 第一は、欽定訳聖書などのように、文学性を備えた宗教的な著作、第二は、「宗教詩」あるいは「信仰詩」としての一部門、第三は、布教に役立ち宗教心を

- はぐくむ著作。T. S. Eliot, "Religion and Literature," in *Selected Essays*, 3rd enl. ed. (1951; rpt. London: Faber and Faber, 1986), pp.389-92.
- (6) *Ibid.*, p.388.
- (7) *Ibid.*, p.390.
- (8) Cleo McNelly Kearns, *T. S. Eliot and Indic Traditions* (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1987), p.135.
- (9) Ackroyd, pp.165-70.
- (10) "Unitarianism," *Benét's Reader's Encyclopedia*, 3rd ed., 1987.
- (11) Lyndall Gordon, *Eliot's Early Years* (1977; rpt. Oxford: Oxford Univ. Press, 1988), pp.11-12.
- (12) T. S. Eliot, *After Strange Gods* (London: Faber and Faber, 1934), p.41.
- (13) 邪執から離脱した不偏中正の道をいい、釈尊以来仏教の伝統的スローガンの一つである。「中道」, 『新・仏教辞典』(文京区: 誠信書房, 1980)。
- (14) T. S. Eliot, "Lancelot Andrewes," in *Selected Essays*, p.341.
- (15) *Ibid.*, p.343.
- (16) T. S. Eliot, "Thoughts After Lambeth," in *Selected Essays*, p.375; hereafter cited as "Lambeth," in *SE*.
- (17) *Ibid.*, p.376.
- (18) *Ibid.*, pp.380, 387.
- (19) Cf. John D. Margolis, *T. S. Eliot's Intellectual Development* (Chicago: Univ. of Chicago Press, 1972), p.150.
- (20) T. S. Eliot, "Lambeth," in *SE*, p.384.
- (21) *Ibid.*, p.387.
- (22) Robert Sencourt, *T. S. Eliot: A Memoir*, ed. Donald Adamson (London: Garnstone Press, 1971), p.108.
- (23) T. S. Eliot, "Lambeth," in *SE*, pp.382-83.